私と犬

水上長吉

ことしは戌の年。戌は十二支の十一番目である。十二支は昔は時刻を示すにもちいられ、「五つ」とも言って、いまの午後七時から八時台を言った。また方位を示す場合は「西北西」に当たる。西北西に当る中京、ベトナムなど波高しの卦（け）か。

戌は犬に通じ、犬の当たり年である。犬は畜類中もっとも人間に親まれ、特に飼主には忠実である。酉と戌とは十二支で隣保のせいか、酉年生れの私は犬が大好きだ。どこででも犬を見かけると、私は呼びかけて見る癖がある。まれに「ハシカ犬」と言ってやたらに噛みつく犬があり、狂犬病も恐ろしい。だからまず様子を観察するが、多くの場合、犬は人間がこわいので、警戒して吠えたり噛みついたりするのだ。こちらから親みを示してちかよれば、たいがいの犬は安心して頭をなでて貰って喜ぶ。人間にもやたらに噛み付いて来る人があるようだ。

ハシカ犬、敬遠されて淋しかろ

さて昭和七年頃、私が神奈川県特高課長の時、立派な警察犬を育てたい念願から、雌雄両親共世界チャンピオンという血統書付のシェパードの仔犬を手に入れ「バルボ」と名付け、生後六ヵ月目には、三ヵ月間犬の訓練所に入れて猛訓練を受けさせたものだ、犬の事で一番困ったのは、昭和十六年、私が徳島県警察部長から宮内省の皇宮警察部長に転任の時だった。宮城内に一匹の犬猫の迷い込みを防ぐのも皇宮警察官の任務だ。皇宮警察部長の官舎は、宮城平川門内にあるので、犬を連れて赴任することは勿論出来なかった。困ったあげく、大阪市に住む従弟（いとこ）が預かってくれる事になった。ところが、赴任して間もなく、大阪から「バルボがヒモを噛み切って逃げた」との電話に驚いて、早速新聞広告を出して探させた。幸い犬は見つかったが、従弟はもう預りきらんと言う。やむなく、玉名市の母の家に送って預かって貰ったが、ここでもバルボはまた鎖を切って逃げた。新聞広告も無駄だった。

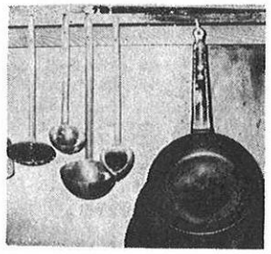
最後に私が犬を飼ったのは、昭和二十七年、桜井知事から副知事に任命させられ、公舎に落ちついてしばらくたってからだった。秘書の富永典吾君が、友人林一郎君所有の肥後犬のオス「三四郎」の仔犬を世話してくれたので「球磨」と名付けた。三四郎は当時肥後犬の元祖といわれる純血種で、九州一円から関東関西迄有名だったという。私の死んだ家内がまた滅法な犬好きで、球磨を座敷に上げたり、夏は蚊に刺されるとマラリヤにかかると言って、蚊帳の中に同居して寝ていた。いまの新屋敷の家で、家内の死を追うように球磨は死んでしまった。

もう飼わん、別るる時の辛過ぎる

私は一年ばかり前から朝の運動を立田山登りに切りかえたが、あの朝、熊大横のＹＭＣＡの花陵会前から、やさしい顔の赤犬が出てきて、立田山頂までついてきた。そして帰りにも私といっしょに山をおりた。それから毎朝六時頃には、私を待っているようになった。数日後、赤は右前肢を痛め、残りの三本足でついて来た。私はかわいそうになって、翌朝から、使い残しの関節炎の薬やオロナインなどを持ってゆき右前肢の患部にすり込んでやった。三週間位で全治した。それからいよいよ親しみがまし、毎朝飛びついて来て、私のシャツは泥だらけになるのがつねだった。ところが昨年九月三十日、山の麓に犬の屍体があった。市の保健所が野犬狩りに毒饅頭を撒いたことを知り、「しまった」と思ったが、赤を繋ぎ止める綱もない。私はいつも山頂で与える菓子を麓で与え、「拾い食いすると危いぞ」と言い聞かせて、赤の無事を祈った。しかし、頂上の赤は広場の方へ行った。ここで毒饅頭を食ったらしい。「早く来い、危いぞ」と呼んだら帰って来た。私が頂上から旧道を下り始めても、いつもと違って頂上に黙って坐っている。「早く来ぬか」と叱ると、腰を上げて、後からついて来たが、「コトリ」と言う物音がしたので振り返ると、赤はもう倒れて死んでいた。私はまだ暖い赤の屍体を抱えて芝生の上に置き、しばし黙禱した。

残念、毒饅頭で鬼籍入り

（元副知事・日本万国博研修事業団会長）



食いしんぼう礼賛

伴征子

私ほどのくいしんぼうも珍らしい、と皆んなから言われます。そのたびにそうかなあ、と一応言ってみるのですが、やっぱりそのようです。いつも腹ペコ熊のようにいったりきたりで食べ物をあさっているのは事実です。目や耳にはいるものが何かのきっかけで頭の中で連鎖してすぐ食べる事につながります――おいしいだろうな――思い立ったら吉日！商大時代には午後から講義は失礼してデパートで材料調達していそいそと帰り台所で大奮闘することが、しばしばありました。

游先生がおっしゃるには、「それはバン君、自制心がないんだね」全くです。そういう訳ですので私にとって毎日が吉日になるわけです。台所で甲斐甲斐しく働く乙女を評して器用だとかまめだとか家庭的だとかうれしいお言葉の数々をちょうだいいたしますが全部ハズレです。ただ、食べる事だけに邁進しているだけ、熱心なのか貪欲が旺盛なのかです。だから工夫（くふう）してつくるのです。でもこうしていても家族の食事は毎日和洋中華。食中毒の心配もなくまかなっていますが、私の趣味からいうとケーキ作りが大好きです。冬はバターをやわらかくするのに苦労しますが、だいたいにおいて食べるのも、作るのも寒い方が向いているようです。夏のパイ作りはバターがベタベタしてヒスがおこりそうでいやです。こういうふうに書くと、さぞかしきれいでおいしいのができるだろうと思われそうですが、クリームできれいにデコレーションしたものではなく素朴で一見民芸的な色、姿です。ちょっというならヨーロッパの田舎家（いなかや）でつくるようなのに似ています（といっても、まだヨーロッパにいったことがないのですが）

何カ月もブランデーにつけこんで糸をひくようになったほしぶどう、夏みかんの皮の砂糖煮、チェリーなどと木の実、それに二、三種のスパイスを振りこんだフルーツケーキを焼くのはたのしいものです。出来上りはブランデーをかけホイルにつつみ、なるべく長くおいた方がいいのですが、がまんできなくて二週間くらいで開けてしまいます。それを皆んなに少しづつわけるのでまわりのものはケチくさいと言います。何十日もかけてつくったものにはなんとも言えぬ愛着があるのです。

私ほどのくいしんぼうではありませんが、食べる事にたいへん関心をもつ友人の古田陽子さんが飯田深雪先生からチーズの本をいただいたからといってチーズケーキをつくろうと、東京からクリームチーズをたくさんだいて帰ってきましたが、しばらくはチーズケーキに凝りました。またコテージチーズの代用をつくろうと素人かんがえで牛乳からそれらしきものをつくったときには一カップ弱のコテージチーズもどきをつくるのに二十本余りの空ビンがならびました。よく彼女と作ったケーキをもち寄って味や型や火かげんや手順などをあーでもない、こーでもないと意見をだしあってささやかな比評会を開きます。

小さい頃、母につれられて、よそのお宅を訪問した時、そこのおねえさん（いまの私くらいの年）がビスケット作りの最中でしたが、それに私が加わって型ぬきを手伝った（といっても邪魔したようなもので、いま思えば気の毒でした）のがケーキ熱の最中です。小学校の頃、ある日突然ドーナッ作りを思い立って、くる日もくる日もドーナッ、ドナーッで家の中に油の臭いがしみこんだ頃にはたばこのけむりでつくるドーナッをみるのもいやなくらい食傷しました、十五年たったいまもドナーッはいけません。

その後クッキー・焼りんご、パイと移りますが、小学頃よりつかった天火は中学校で二代目、もうこれも焼き上げる量も限られるので営業用の大きい天火一台そなえつけたいと思っています。

食べる事への憧れはさらに大きくなり先に書いた古田嬢と世界のたべあるきをしたいと言っていますが、ソ連にバレエは見にゆきたいし、ピアノはほしいし、ホンダの赤い軽自動車はほしいし、三ケ月に一度は東京へレッスンにゆきたいしいい格好はしたいし……

「あーたばっかりたい、そぎゃん結構なこつばかるいいよっとは」と母をはじめ家族のものはあきれかえっています。

なるほどあんまり結構なはなしばかりで特に食べる事には恵まれすぎていて、なにかしらバチがあたりそうですが、細くカッコよくなりたいという願望とはよそにどんなに努力しても肥ったままなのは、すでにバチがあたっているのかも知れません。

（熊本バレエ研究所代表）